

eポートフォリオシステム Mahara を用いた 「広島大学英語 Can-Do リスト」の活用

鬼田崇作・榎田一路・上西幸治・草薙邦広・阪上辰也
田北冬子・達川奎三・森田光宏・吉川りさ
広島大学外国語教育研究センター

1. はじめに

広島大学では、学生の英語力を評価する方法の一つとして、*TOEIC*[®] Listening & Reading Test（以下、*TOEIC*[®] L&R）の団体特別受験制度（institutional program, 以下 IP）を導入しており、基本的に全学部生が入学後の5月に本テストを受験する。そのため、学生は入学時点での英語力の指標として、本テストの得点（以下、*TOEIC* スコア）を有している。

しかし、多くの学生にとって、*TOEIC*[®] L&R の受験は初めてであり、自身の *TOEIC* スコアがどの程度の英語力を意味するのか、具体的にイメージしにくい。また、彼らの大学入学以前の英語学習に関する主たる動機づけは、大学へ入学することであると思われるため、入学後は英語学習に対する動機づけが低下しがちである。そこで、学生に対して *TOEIC* スコアをわかりやすくイメージしやすいものにし、学生の英語学習に対する動機づけを維持し（あるいは高め）、大学入学後も各自が目標を設定して英語学習を行うことを支援する枠組みが必要となる。

本稿では、このような背景のもとに開発された「広島大学英語 Can-Do リスト」を紹介し、その Can-Do リストを用いた、学生の英語学習を支援する枠組みの eポートフォリオシステム Mahara での実装及びそれを用いた実践について報告を行う。

2. 広島大学英語 Can-Do リスト

2.1. Can-Do リスト開発の背景

広島大学の学士課程教育においては、夜間主コースを除き、教養教育の英語科目として6つの対面授業(6単位)が必修科目として指定されている。さらに一部の主専攻プログラムにおいては、オンラインで基礎的な語彙と文法を学ぶ2科目(計2単位)が必修として指定されている(図1)。三年次以降は、専門科目として英語を学ぶ機会のあるプログラム以外では、自主的に学習を行わない限り、英語学習を行う機会が著しく少なくなる。そのため、英語による高度な運用力を獲得するためには、学生による授業外での自主的な英語学習を支援する必要がある。

広島大学外国語教育研究センターでは、従来から広島大学の構成員に対して自主的な英語(外国語)学習を行うため、オリジナル教材の提供やeラーニングコンテンツの導入など、様々な取り組みを行ってきた。例えば、平成20年(2008年)よりポッドキャストによる英語学習番組「Hiroshima University's English Podcast」(榎田, 2009)を配信しており、現在はさらに「English News Weekly」を追加した計2番組を配信(提供)している。その他にも、*TOEIC* 学習用のオリジナルeラーニングコンテンツ(*TOEIC*[®] Practice Questions)や学外のeラーニングサービス(ALC NetAcademy 2, ALC NetAcademy NEXTなど)、多読教材の提供などを通し、授業外での自律学習環境の整備に努めてきた。

しかし、一定の強制力を伴う授業での英語学習とは異なり、授業外での英語学習は、学習教材を提供するだけでは不十分であり、学生による自主的な学習を促進することは難しい。授業外での学習を促進するためには、学生の英語学習に対する動機づけを高める工夫や、さらなる環境の整備が必要となる。広島大学英語 Can-Do リストは、このような背景のもと、学生の英語力を把握し、学習を支援する取り組みの一環として開発されたものである。

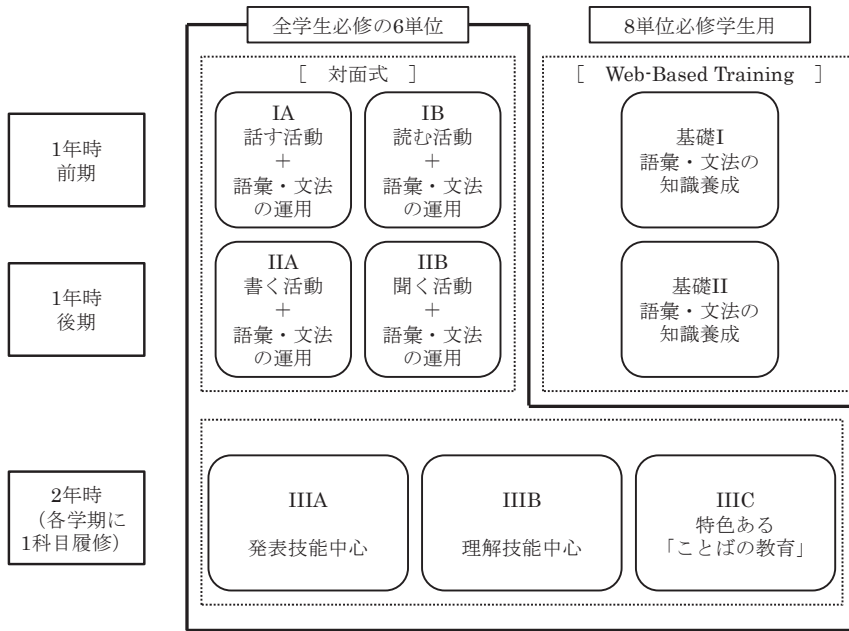


図1 広島大学における教養教育での英語授業
(鬼田他, 2017, p.185; 森田・榎田・鬼田・阪上・草薙・吉川, 2017, p.64)

2.2. Can-Do リストの概要

広島大学外国語教育研究センターでは、2016年度に「広島大学英語 Can-Do リスト」を開発した。これは、一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会（以下、IIBC）が開発した質問紙を用いて、広島大学の学生を対象にデータを収集し開発したものである。

Can-Do リストの開発は、次の手順で行われた。第一に学生の TOEIC スコアと質問紙調査の結果を紐付けた。その後、学生の TOEIC スコアを基に、100 点刻みで 8 つの習熟度帯（200-295, 300-395, 400-495, 500-595, 600-695, 700-795, 800-895, 900-995）を設定し、英語の四技能（リーディング、リスニング、スピーキング、ライティング）にインタラクションとファンクションの 2 領域を加えた計 6 領域に渡る Can-Do 記述を、「Can-Do 項目」と「Can-Do with Difficulty 項目」として各習熟度帯に振り分けた（詳細は鬼田他, 2017 を参照のこと）。

3. Mahara による広島大学英語 Can-Do リストの活用

3.1. Can-Do リストプラグインの開発と機能

Can-Do リストを用いた新たなプラグインは、株式会社 VERSION 2 の協力により開発された。

IIBC との共同研究において開発された広島大学英語 Can-Do リストを用いて、以下の3つのコンテンツを実装した（プラグインの開発、機能の詳細については、榎田・鬼田・森田・阪上・細川、2017を参照のこと）。このうち、(2)と(3)が本実践における特徴的な機能である。

(1) Can-Do リストに基づくよる学生の英語力の記述

これは、各学生がTOEICスコアを入力すると、各領域（リーディング、リスニング、スピーキング、ライティング、インタラクション、ファンクション）におけるCan-Do記述が提示される機能である。学生がTOEICを受験すれば、客観的な英語力の指標が得られる一方で、彼らにとっては、500点、600点といったスコアがどのような能力を示すのかが具体的にイメージしにくい。そこで、鬼田他（2017）による広島大学英語 Can-Do リストの開発においては、広島大学の学生のTOEICスコアとCan-Do記述の結びつけを行い、TOEICで何点を取れば、英語のリーディング、リスニング、スピーキング、ライティング、インタラクション、ファンクションの各領域において何ができるか、を具体的に示した。これにより、TOEICスコアを持つ学生一人ひとりに対して、英語で何ができるのかを示すことができるようになった。先述のとおり、広島大学の新生は入学後の5月にTOEICを受験することになる。そこでのスコアを用いて、入学時点の英語力をCan-Doリストの形で全学生に示すことが可能となる。

(2) 目標とすべきTOEICスコアの提示

これは、今後英語を用いてできるようになりたいCan-Doリスト内の項目を選択することにより、それらができるようになるために目指すべきTOEICスコアを提示する機能である。TOEICなどの標準的な外部試験を導入すれば、学生は特定のスコアを取得することを目指すという波及効果が見られるようになる。高いスコアを目指すこと自体は、英語の学習を進める上で悪いことではないかもしれないが、学生が置かれている状況や目標とすべき英語力は個人ごとに異なるため、具体的な中身を伴うこと無しに、特定のスコアのみが全体の目標とされれば本末転倒となる。そこで、英語教育の充実においては、単に学生に高いスコアを得ることを追い求めさせるのではなく、具体的な中身を伴う能力の獲得を支援する必要がある。このような背景のもと、本プラグインは、広島大学に入学後、学生生活を通して、各学生がどのような目標のもとで、どのように英語学習を進めるのか、という計画を個別に作成することを手助けする。(1)において示された入学時点での英語力（TOEICスコアとCan-Doリスト）をもとに、各学生が英語を用いて何ができるようになりたいか、どのような力をつけたいかなど、今後の学習目標を個人毎に設定することができる。

(3) 目標達成への道筋の提示

これは、TOEICの目標スコアを得るための方法として、広島大学で提供されている授業や学習教材などを提案する機能である。(2)で目標が提示されたとしても、どのような学習をどのように行うかが示されなければ、学生は手探りに市販のTOEIC対策の書籍で学習したり、既に馴染みのある語彙リストによる学習や文法教材の復習をしたりすることが多い。無論、このような学習も無駄ではないが、学生が大学に所属している利点の1つは、授業やeラーニング教材など、多様な学習コンテンツを利用できることである。そこで、教養教育科目として提供されているが必修ではない英語授業や、外国語教育研究センターが提供している教材（ポッドキャスト番組、

TOEIC 対策コンテンツ)、図書館提供の多読教材などについて、目指すべき英語力のレベルや内容に合わせて難易度の異なる学習コンテンツを提案することにより、目標スコアを得るため、どのような学習をどのような順番で行えば良いかの道筋を示すことが可能となる。これにより、学生はただ闇雲に TOEIC の学習をするのではなく、効果的に英語学習を行うことができると考えられる。

3.2. e ポートフォリオシステムにおけるインターフェース

本プラグインは、(1) 各学生が自らの情報を入力する段階と、(2) それをもとに結果を提示する段階、の二段階からなる。

(1) の情報入力段階は、さらに 2 つの下位の段階に分けられる。第一に、学生はその時点で最新の TOEIC スコアを入力する (図 2 上部)。このスコアが広島大学英語 Can-Do リストの内容と照合され、その時点の英語力の記述や今後の目標スコアに利用される。第二に、今後英語を用いてできるようになりたい項目を各自で選択する (図 2 下部)。これは、「Reading」、「Writing」、「Speaking」、「Listening」、「Interaction」、「Function」の各領域において広島大学英語 Can-Do リストの各項目が示されるものである。ここでは、始めの画面で入力した TOEIC スコアからプラス 200 点上のスコア帯までに属する Can-Do リスト項目が示される。これは、それより上のスコア帯に属する Can-Do リスト項目は、目指すべき Can-Do リストとしては難しすぎるため、現実的な目標設定としては不適切であると判断したためである。もしこのような制限が無ければ、例えば、現時点の TOEIC スコアが 200 点である学生に対して、TOEIC900 点を得て初めて達成できるような Can-Do リスト項目が多く示されることとなり、現実的な目標設定ができず、逆に学生の英語学習動機づけを減退させてしまう恐れがある。図 2 下部では、リーディングにおける Can-Do リスト項目が示されているが、図内中部にある「Writing」、「Speaking」、「Listening」、「Interaction」、「Function」の文字をクリックすれば、それぞれの領域における Can-Do リスト項目が提示される。

(2) の結果提示の段階では、(1) の段階で示された情報をもとに、今後目指すべき TOEIC の目標スコアと英語でできるようになりたい Can-Do リスト項目 (図 3)、現在のスコアでできること (図 4)、目標達成のための学習コンテンツのサジェスト (図 5)、が示される。今後目指すべき目標スコアは、上記 (1) の段階で選択した今後英語を用いてできるようになりたい Can-Do リスト項目から逆算して算出されるようになっている。そのため、目標スコアは学生毎に異なり、その時点の英語力から具体的に目標にできるスコアの範囲に収まるようになっている。また、目標スコアの下には、そのスコアを達成した際に英語でできるようになる Can-Do リスト項目が示される (図 3)。ここでも、具体的な目標スコアと広島大学英語 Can-Do リストが照合され、そのスコアを得た時点で英語を用いてできること、やや難しいがなんとかできること、の一覧が示される。次に、現時点での英語力の記述として、始めに入力した TOEIC スコアから推定される、現時点の TOEIC スコアでできることの一覧が示される (図 4)。この一覧が学生のその時点の英語力に対するフィードバックとなる。これにより、学生は自らの TOEIC スコアと共に、具体的で中身の伴う記述として自らの英語力を知ることができる。現時点では、この情報は当該学生のみへの公開に留められているが、将来的な利用可能性としては、学生からの同意のもと、授業担当教員へこの情報を提供することも考えられる。これにより、授業担当教員は、自らが担当する学生は英語で何ができているのか、何ができないとできているのかなどを知ることができ、授業計画の際に有益な情報となるであろう。最後に、目標スコアを達成するために利用可能な学

習コンテンツが、リスニング、リーディング、総合教材、対面授業などのカテゴリー毎に提示される（図5）。それぞれの学習コンテンツにはwebリンクが貼られており、学生はMahara上で各コンテンツをクリックすると、当該のウェブページに移動することができる。この内容は学生のTOEICスコアや今後の目標によって異なるため、学生一人ひとりの状況に合わせたきめ細かな支援を行うことが可能となる。

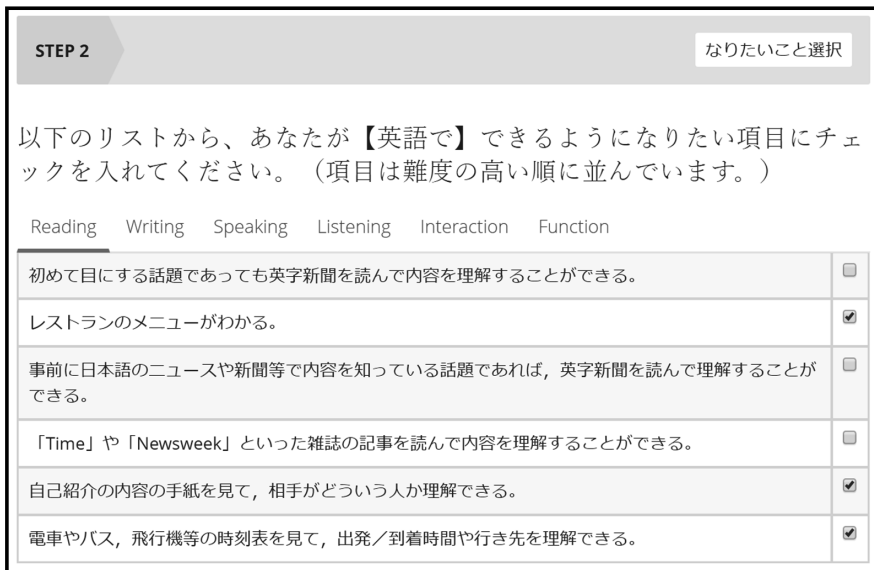


STEP 1 スコア入力

現在のスコアを入力して下さい。

500		
7	8	9
4	5	6
1	2	3
←	0	c

次へ キャンセル



STEP 2 なりたいこと選択

以下のリストから、あなたが【英語で】できるようになりたい項目にチェックを入れてください。（項目は難度の高い順に並んでいます。）

Reading Writing Speaking Listening Interaction Function

初めて目にする話題であっても英字新聞を読んで内容を理解することができる。	<input type="checkbox"/>
レストランのメニューがわかる。	<input checked="" type="checkbox"/>
事前に日本語のニュースや新聞等で内容を知っている話題であれば、英字新聞を読んで理解することができる。	<input type="checkbox"/>
「Time」や「Newsweek」といった雑誌の記事を読んで内容を理解することができる。	<input type="checkbox"/>
自己紹介の内容の手紙を見て、相手がどういう人か理解できる。	<input checked="" type="checkbox"/>
電車やバス、飛行機等の時刻表を見て、出発／到着時間や行き先を理解できる。	<input checked="" type="checkbox"/>

図2 Mahara 上で各学生が自らの情報を入力する画面

目標スコア		
700 - 795		現在のスコア 500
なりたいリスト		
カテゴリ	項目	レベル
Reading	レストランのメニューがわかる。	できる
Reading	電車やバス、飛行機等の時刻表を見て、出発／到着時間や行き先を理解できる。	できる
Reading	自己紹介の内容の手紙を見て、相手がどういう人か理解できる。	できる
Writing	自分の履歴書（経歴を示す書類）を書くことができる。	何とかできる
Writing	自分の家の住所を書くことができる。	できる
Writing	友達に待ち合わせの場所や時間を知らせるメモを書くことができる。	できる
Speaking	今日一日の自分の行動を順を追って説明できる（例：何時に起き、次に何をし…といった具合）	できる

図3 学生の入力をもとに目標スコアと英語のできるようになりたいCan-Doリスト項目（なりたいリスト）を提示する画面

現在のスコアで出来ること	
Reading	Writing Speaking Listening Interaction Function
項目	レベル
映画の英語字幕（クローズド・キャプション）を見て内容を理解できる。	何とかできる
CD等に付属している英語の楽曲の歌詞を見て内容を理解できる。	何とかできる
友達からのBirthday CardやChristmas Card、年賀状等の簡単なハガキを読み、理解することができる。	できる
ペーパーバック等の物語、小説を読んで理解することができる。	何とかできる
英語で書かれた住所を見てその場所を（地図上等で）特定することができる。	何とかできる
英語で書かれた自分に興味がある内容のホームページを見て内容を理解できる。	何とかできる
レストランのメニューがわかる。	何とかできる
事前に日本語のニュースや新聞等で内容を知っている話題であれば、英字新聞を読んで理解することができる。	何とかできる

図4 学生の入力をもとに現在のスコアで出来ること一覧を提示する画面

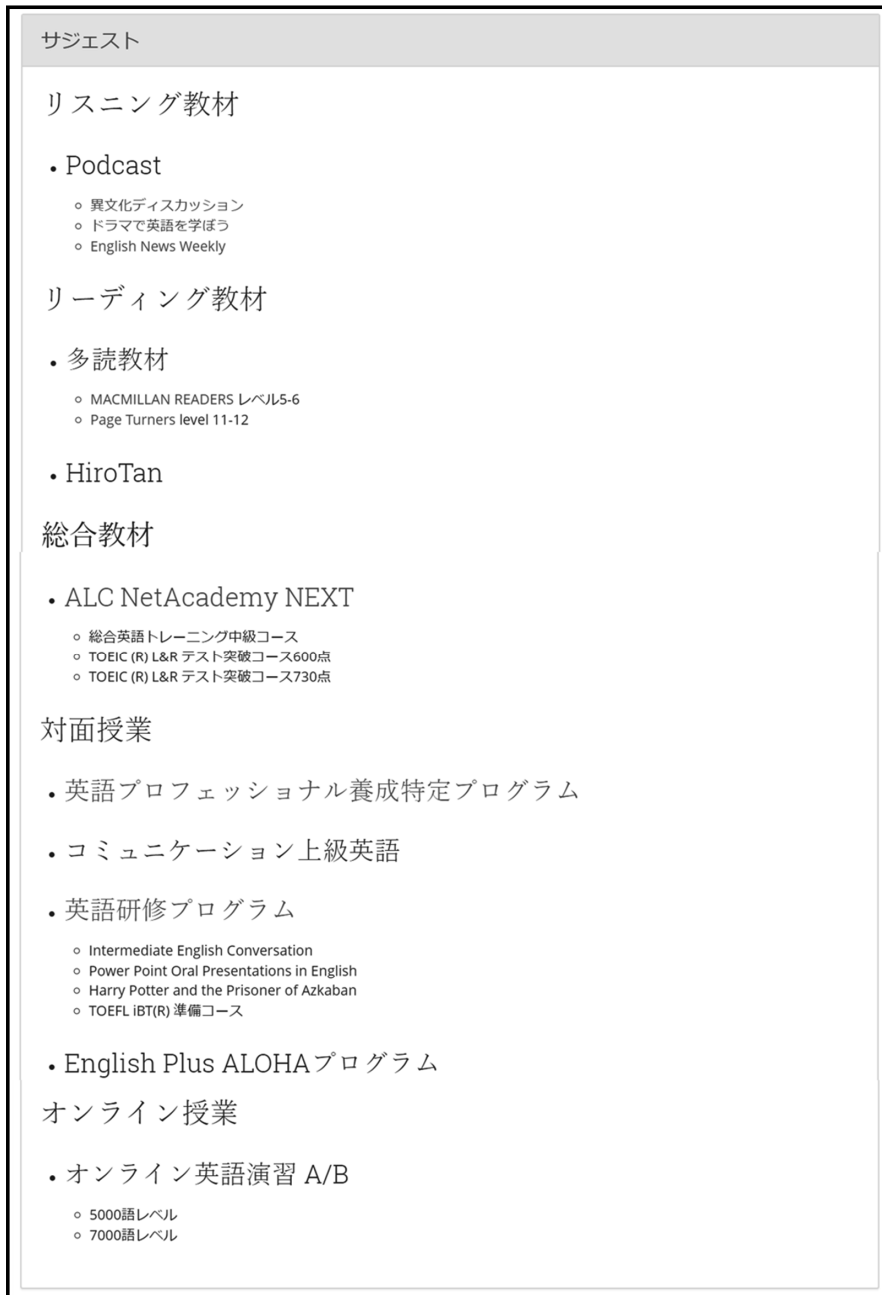


図5 学習内容のサジェストを示す画面

4. 実践

4.1. 対象

本実践の対象者は、広島大学の理系学部学生 108 名である。彼らは、図 1 に示す 8 単位必修学生である。本実践対象者の背景情報は表 1 に示すとおりである。

表 1 本実践対象者の背景情報

	平均値	標準偏差	最小値	最大値
TOEIC スコア	540.46	113.36	250	880
自己評定順位				
リーディング	1.76	0.95	1	4
リスニング	2.44	1.13	1	4
スピーキング	2.50	0.98	1	4
ライティング	3.31	0.83	1	4

注：TOEIC スコアは一般的な算術平均値、自己評定順位の値は 1 から 4 の平均順位である。

4.2. 授業内容

本実践は、図 1 に示される英語 8 単位化学生のコミュニケーション IB および IIB における実践である。コミュニケーション IB および IIB の授業では、『A Four-Skills Approach to the TOEIC® Test: Gateway to Global Communication』(Enokida, Hiramoto, & Fraser, 2016) を統一教科書として使用し、それとともにコミュニケーション基礎 I および基礎 II (図 1 参照) との共通教材として「広大スタンダード語彙リスト 6000」(以下、HiroTan) を用いている。この両者は、内容と学習進度につながりを持たせており、対面学習と web による自学自習を連動させ、通年の学習ができるようにデザインされている。

HiroTan は、単語の難易度が標準の「標準リスト」、難易度が高めの「発展リスト」からなり、標準リストとして 40 チャプター (a01 から a40)、発展リストとして 20 チャプター (b01 から b20) が用意されている。各チャプターには 100 単語が掲載されており、それぞれに品詞、日本語訳、例文とその日本語訳が示されている。それらの情報は音声化もなされており、web 上で再生できる他、mp3 ファイルとしてダウンロードすることも可能である。コミュニケーション IB、IIB およびコミュニケーション基礎 I、II では、前期と後期で HiroTan の内容を半分ずつ学習することになっており、前期に標準リストの a01 から a20、発展リストの b01 から b10 の 3,000 語、後期に標準リストの a21 から a40、発展リストの b11 から b20 の 3,000 語の学習を行う。

コミュニケーション IB、IIB の授業においては、履修者は授業外の学習として、(1) HiroTan の学習、(2) 追加教材としての「ぎゅっと e」(北辰映電株式会社) を用いたリスニング問題と文法問題の学習、の 2 点が求められる。その定着の度合いについて、毎週授業内でテストを行う。HiroTan については、毎週の授業では標準リストの 2 チャプターが範囲として指定され、定期的に行われる小テストにおいては、発展リストも範囲として加えられる。ぎゅっと e については、毎週リスニング問題 80 問、文法問題約 40 問がテストの範囲として指定されている (表 2 参照)。

表2 コミュニケーションIBにおける授業計画

	テスト範囲	教科書範囲
第1回	オリエンテーション, 実力診断テストなど	
第2回	HiroTan (a01-a02), ぎゅっと e (L001-080, G001-042)	Unit 1 Unit 2
第3回	HiroTan (a03-a04), ぎゅっと e (L081-160, G043-084)	
第4回	HiroTan (a05-a06), ぎゅっと e (L161-240, G085-126)	
第5回	第1回小テスト (第2回から第4回の内容, HiroTan b01-b03)	
第6回	HiroTan (a07-a08), ぎゅっと e (L241-320, G127-168)	Unit 3 Unit 4 Unit 5
第7回	HiroTan (a09-a10), ぎゅっと e (L321-400, G169-210)	
第8回	HiroTan (a11-a12), ぎゅっと e (L401-480, G211-252)	
第9回	HiroTan (a13-a14), ぎゅっと e (L481-560, G253-294)	
第10回	第2回小テスト (第6回から第9回の内容, HiroTan b04-b06)	
第11回	HiroTan (a15-a16), ぎゅっと e (L561-640, G295-336)	Unit 6 Unit 7 Unit 9
第12回	HiroTan (a17-a18), ぎゅっと e (L641-720, G337-378)	
第13回	HiroTan (a19-a20), ぎゅっと e (L721-800, G379-421)	
第14回	実力診断テストなど	
第15回	TOEIC IP	
第16回	第3回小テスト (第11回から第13回の内容, HiroTan b07-b10)	

注：HiroTanにおけるa01などの数字は語彙リストにおけるチャプターを表す。1チャプターには100単語が収録されており、aは易しめの標準リスト、bは難しめの発展リストである。
ぎゅっとeにおけるLはリスニング問題、Gは文法問題を表す。

4.3. Maharaにおける広島大学英語Can-Doリストの利用

本実践は、対象者が1年次前期の学期末に受験した最新のTOEIC IPスコアについてのものである。表2に示されるとおり、彼らはコミュニケーションIBの授業の一環（第15回）として、2017年7月にTOEIC IPを受験した。そのスコアが個々の学生に返却された後、Mahara上でTOEICスコアの入力、「英語でできるようになりたい」項目の選択、「現在のスコアでできること」、「目標スコア」、「なりたいリスト」の確認を行った。その後、プラグインのサジェスト機能（図5）で示される各種の教材などを確認し、夏季休暇中にその内容を学習するように指導された。

4.4. Maharaにおける広島大学英語Can-Doリストの使用感に関するアンケート調査

夏季休暇終了後、後期のコミュニケーションIIBの第1回授業において、アンケート調査が実施された。本調査の目的は、本プラグインの機能について、使用学生から意見を集め、それを今後の運用方法や内容の改善に活用することである。質問項目は次のとおりである。

(1) プラグインのグラフィック・ユーザー・インターフェースについて

まず、プラグインのグラフィック・ユーザー・インターフェース（以下、GUI）について、以下の各項目に「1：非常に悪い」～「5：非常に良い」で回答を求めた。

(Q1-1) スコア入力の操作性

(Q1-2) 「なりたいこと選択」画面の操作性

(Q1-3) 「目標スコア」, 「なりたいリスト」, 「サジェスト」, 「現在のスコアでできること」画面の見やすさ

(2) プラグインの有効性について

次に、プラグインの機能の有効性について、以下の各項目に「1. 全く当てはまらない」から「5. とても当てはまる」の5段階で回答を求めた。

(Q2-1) 私は、目標スコアを知ることができるのは有効だと思う。

(Q2-2) 私は、Can-Do 記述の形で英語力を示してくれるのは役に立つと思う。

(Q2-3) 私は、「なりたいリスト」の実現に向けて努力していこうと思う。

(Q2-4) 私にとって、「サジェスト」の内容はわかりやすいと思う。

(Q2-5) 私は、「サジェスト」に示された学習方法を試してみたいと思う。

(Q2-6) 私は、「サジェスト」に示された教材を試してみたいと思う。

(Q2-7) 私は、「現在のスコアで出来ること」は自分の英語力に合っていると思う。

(Q2-8) 私は、今後も Mahara を定期的に使っていききたいと思う。

以上の項目に加え、最後に Mahara というシステムや、「Can-Do 目標設定」機能について、その他の意見や要望があれば、自由記述による回答を求めた。

4.5. 結果と考察

本節では、上記のアンケート調査の結果を示す。図6はプラグインのGUIについてのアンケート結果(Q1-1からQ1-3)、図7はプラグインの有効性についてのアンケート結果(Q2-1からQ2-8)をそれぞれ示す。

いずれのアンケート項目も、5件法で回答を求めていることから、「3」の回答がスケールの間となる。そのため、図6と図7においてアンケート調査結果を視覚化するにあたり、「3」の回答の中央を0となるように配置し、0から左右に伸びる帯の長さによって、アンケートの各項目に対して、調査対象者が相対的に否定的か肯定的かを示す。図6、7は統計解析環境R(R Development Core Team, 2017)のHHパッケージ(Heiberger, 2016)を用いて作成された。

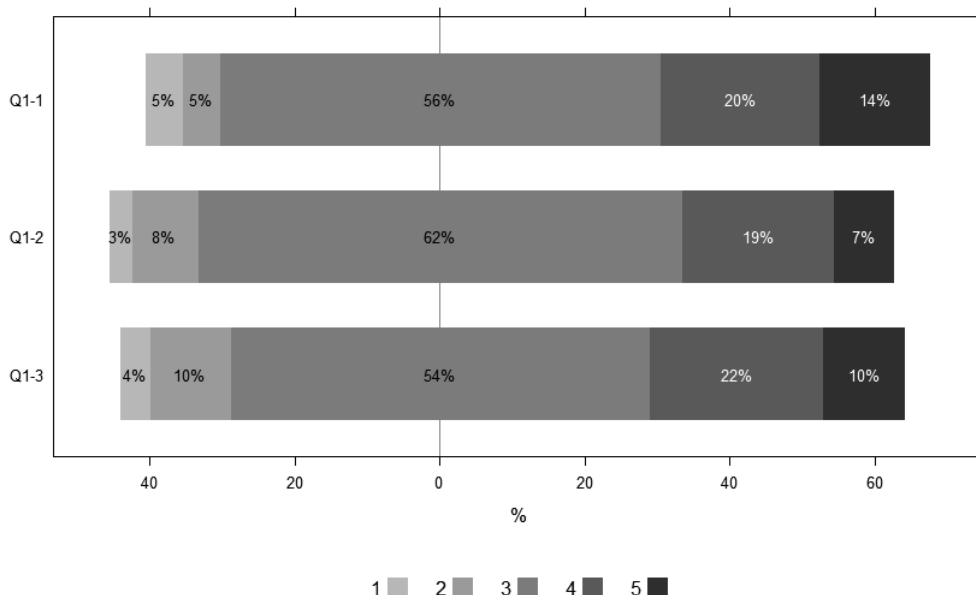


図6 Can-Do リストプラグインにおけるグラフィック・ユーザー・インターフェースに関するアンケート調査の結果（凡例の1は「非常に悪い」、5は「非常に良い」を表す）

図6は、プラグインのGUIを尋ねる質問項目Q1-1からQ1-3についての結果である。図6が示すとおり、質問項目Q1-1からQ1-3はいずれも、5件法で「3」と回答する者が最も多く、全回答の過半数を占めた。「1」や「2」と否定的な回答した者はいずれの項目でも20%に満たなかったが、「4」や「5」と肯定的な回答した者は20%を超え、相対的には肯定的な回答が多い結果となった。

ただし、この3つの質問項目は、プラグインのGUIについての項目であることに注意が必要である。本プラグインを含め、そもそもGUIとは高いわかりやすさが求められる。その中で、本プラグインに対して「1」や「2」の否定的回答よりも「4」や「5」の肯定的回答が相対的に多くなるのは、ある意味で当然の結果である。むしろ、「3」の回答が50%以上を占めている現状は、本来GUIとはわかりやすいのが当たり前ということを考慮に入れると、やや否定的な回答結果であると捉えられなくもない。例えば、Q1-1で尋ねたスコア入力の実操作性においては、Mahara画面に示される電卓のように配列された数値を選択（クリックやタップ）して数値を入力する形式であり（図2上部参照）、PCやスマートフォンのキーボード操作により数値入力をするわけではない。また、数値入力を間違えた場合、キーボードのBackspaceで消すことはできず、電卓のような配列の左下にある「←」を選択しなければならない。このように、直感的な操作性とはやや異なることが「3」の回答が多くなった原因であろうと推測される。本アンケート結果をもとに、今後の改善を行う必要がある。

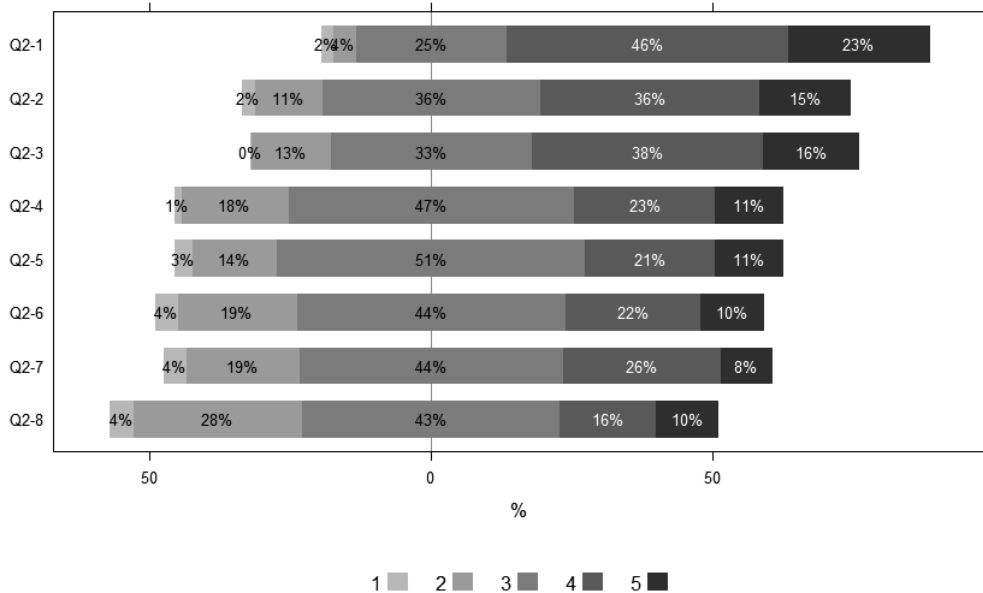


図7 Can-Do リストプラグインの有効性に関するアンケート調査の結果
(凡例の1は「全く当てはまらない」、5は「とても当てはまる」を表す)

図7は、プラグインの有効性を尋ねるQ2-1からQ2-8についての結果である。図7が示すとおり、Q2-1からQ2-3は肯定的な回答（帯が0よりも右に寄る）、Q2-4からQ2-7はやや肯定的な回答（帯が0よりもやや右に寄る）、Q2-8はやや否定的な回答（帯が0よりもやや左による）であった。

Q2-1からQ2-3は「私は、目標スコアを知ることができるのは有効だと思う」（Q2-1）、「私は、Can-Do 記述の形で英語力を示してくれるのは役に立つと思う」（Q2-2）、「私は、「なりたいリスト」の実現に向けて努力していこうと思う」（Q2-3）である。この中で、Q2-1やQ2-2は、プラグインの機能や内容が「有効だと思う」や「役に立つと思う」など、回答者自身の具体的な行動が求められる項目となっている。またQ2-3は将来的に「努力していこうと思う」というやや曖昧な項目であり、肯定的な回答をし易い項目であったものと思われる。

Q2-4からQ2-7は、「私にとって、「サジェスト」の内容はわかりやすいと思う」（Q2-4）、「私は、「サジェスト」に示された学習方法を試してみたいと思う」（Q2-5）、「私は、「サジェスト」に示された教材を試してみたいと思う」（Q2-6）、「私は、「現在のスコアで出来ること」は自分の英語力に合っていると思う」（Q2-7）である。この中で、Q2-5とQ2-6は「試してみたいと思う」という、回答者自身の具体的な行動が求められる項目となっており、それらについて肯定的な回答を行うことには躊躇があったものと思われる。また、Q2-4はサジェスト内容が「わかりやすいと思う」、Q2-7はCan-Do リストで示される回答者自身の英語力の記述が「合っていると思う」という項目であり、いずれも回答者の具体的な行動が求められる項目ではない。それにも関わらず、肯定的な回答はやや少なかった。これは、Q2-4にて示されるサジェスト内容が回答者にとって未知の情報を多く含んでおり、その内容が想像しづらかったことが原因だと思われる。

る。そのため、学生をサジェストで示される学習コンテンツに触れさせるなどして、親密度を高め内容に習熟されるなどの教育的介入も必要となるであろう。また Q2-7 の結果は、学生が感じる自身の英語力と Can-Do リストで示される内容が合致していないことを示唆しており、Can-Do リスト自体の改善可能性を示している。これは、広島大学英語 Can-Do リストが、いわゆる四技能に加えて「人とやりとりする力」(Interaction) と「機能的表現力」(Function) を加えた 6 領域で構成されるにもかかわらず、そのための英語力の指標として TOEIC® L&R の結果しか使用されていないことに一因があるのかもしれない。今後は、TOEIC® Speaking & Writing Tests など発信技能の結果も加えて Can-Do リストを修正する必要もあるであろう。

最後に、Q2-8 は「私は、今後も Mahara を定期的に使っていきたいと思う」である。これは、上記の Q2-5 と Q2-6 と同様に、回答者自身の具体的な行動が求められる項目であり、肯定的な回答を行うことに躊躇があったものと思われる。そのため、Mahara を用いた e ポートフォリオシステムを改善するため、Can-Do プラグインのさらなる充実や英語学習情報の提供、フィードバックの多様化などを行う必要があるだろう。

5. おわりに

本稿では、オープンソースの e ポートフォリオシステムである Mahara を用いて、広島大学英語 Can-Do リストを活用する実践について報告を行った。本実践では、広島大学外国語教育研究センターにおいて開発した Can-Do リストを Mahara 上で運用するプラグインを用いて、(1) 各学生の TOEIC IP スコアに基づき、彼らの英語力を Can-Do 記述の形で示し、(2) 学生一人ひとりの英語学習到達目標を個別に示し、(3) 各学生がその目標を達成するための学習材料の提案を行った。さらに、実践の対象であった学生に対してプラグインの GUI や有効性についてのアンケート調査を行った。

実践の結果、学生の反応は概して肯定的であったが、GUI や Can-Do リストの修正など、改善すべき点も確認された。今後は、本実践の内容をもとに、定期的な目標スコアのアップデート、それに伴うサジェスト内容のアップデート、ポートフォリオの積み重ねなどを行い、英語教育実践のさらなる改良を行う必要があるだろう。

参考文献

- Enokida, K., Hiramoto, S., & Fraser, S. (2016). *A four-skills approach to the TOEIC® Test: Gateway to global communication*. Tokyo: Eihosha.
- Heiberger, R. M. (2016). *HH: Statistical Analysis and Data Display*. R package version 3.1-31. <http://CRAN.R-project.org/package=HH>
- R Development Core Team. (2017). *R: A language and environment for statistical computing [Computer software]*. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. Retrieved from <http://www.R-project.org>
- 榎田一路 (2009). 「英語学習用ポッドキャスト “Hiroshima University’s English Podcast” —オリジナル番組の制作と配信システムの構築—」『広島外国語教育研究』第 12 号, 71-83.
- 榎田一路・鬼田崇作・森田光宏・阪上辰也・細川元 (2017). 「[「広島大学英語 Can-Do リスト」とリーダーチャートの Mahara 用プラグイン開発]」『Mahara Open Forum in Hiroshima 講演論文集』

鬼田崇作・榎田一路・上西幸治・草薙邦広・阪上辰也・田北冬子・達川奎三・森田光宏・山本五郎・吉川りさ (2017). 「広島大学英語 Can-Do リストの開発」『広島外国語教育研究』第 20 号, 185-200.

森田光宏・榎田一路・鬼田崇作・阪上辰也・草薙邦広・吉川りさ (2017). 「声掛けメールによる WBT 自学自習の促進」『中国地区英語教育学会研究紀要』第 47 号, 63-72.

ABSTRACT

Application of the “Hiroshima University English Can-Do List” in the e-portfolio System Mahara

Shusaku KIDA, Kazumichi ENOKIDA, Koji UENISHI
Kunihiro KUSANAGI, Tatsuya SAKAUE, Fuyuko TAKITA
Keiso TATSUKAWA, Mitsuhiro MOIRITA, Lisa YOSHIKAWA
Institute for Foreign Language Research and Education
Hiroshima University

This report describes the application of the “Hiroshima University English Can-Do List” through an open-source e-portfolio system called “Mahara”. In 2016, the Institute for Foreign Language Research and Education at Hiroshima University developed the can-do list, which was based on a questionnaire made by the Institute for International Business Communication. It includes can-do statements not only in the so-called four English skills (reading, listening, speaking, and writing) but also in two additional areas (interaction and function). The developed can-do list was implemented in the e-portfolio system as an attempt to evaluate students’ English proficiencies and to set their learning goals. In this system, each student inputs his/her current TOEIC score, and then selects can-do statements which s/he would like to achieve. The system then shows a target TOEIC score which s/he should get in order to achieve the learning goal, and suggests learning contents for it. This paper reports on the first trial of the system administered to undergraduate students at Hiroshima University, and shows their reactions. Future directions for utilization of the can-do list and the Mahara system are also discussed.